

グローバルリーダー育成事業 事後活動連携強化プログラム

2014年2月7日～2月12日



グローバルリーダー育成事業 事後活動連携強化プログラム

概要

日本青年国際交流機構の事後活動派遣代表者の3名が、事業終了後の活動の説明及び国内や世界各国のネットワークづくりについて説明するために、石巻～東京間に乗船し、プロジェクトマネジメント・セミナーを含む事後活動セッションを2月10日(月)に開催するほか、セッション以外の時間には、船内で「世界青年の船」事業や「世界青年の船」事後活動を紹介するインフォメーション・デスクを設置し、参加青年と直に意見交換や情報提供を行った。

ねらい

派遣者は、グローバルリーダー育成事業の事後活動連携強化プログラムにおいて、以下のねらいを持って事後活動セッション及びその他の自主活動を実施する。

- ・ グローバルリーダー育成事業参加青年(以下、「参加青年」)が内閣府の実施する青年国際交流事業、日本青年国際交流機構(以下、「IYEO」)及び「世界青年の船」事後活動組織(以下、「SWYAA」)について理解を深められるようセッション及び自主活動に取り組む。
- ・ 事業終了後、IYEOやSWYAA等を通じて、様々な社会貢献活動にどのように取り組めばよいかを参加青年に伝えるために、日本及び外国の「世界青

年の船」事業既参加青年がこれまで行っている事後活動の事例を紹介する。

- ・ SWYAAのネットワークや既参加青年が所属する団体(NPO団体等)を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- ・ 参加青年が事業後に、陸上・船上研修で学んだことをいかして自国で何ができるかを考え、具体化するための活動案を作成し、ほかの参加青年と共有するためのサポートをする。
- ・ 既参加青年及びIYEOの代表として、参加青年と事後活動についての意見交換を行うとともに、参加青年の事後活動についてのアドバイス等を行う。

派遣日程

月 日	活動内容
2月7日(金)	派遣代表者 宮城県石巻市集合 グローバルリーダー育成事業 参加青年と合流・乗船
2月8日(土)	石巻港出航 事後活動セッション実施に向けての準備、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置
2月9日(日)	事後活動セッション実施に向けての準備、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置
2月10日(月)	事後活動セッション実施に向けての準備 事後活動セッション(プロジェクトマネジメント・セミナー)
2月11日(火)	事後活動セッション振り返り、船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置等
2月12日(水)	グローバルリーダー育成事業 東京晴海港着 派遣代表者解散

派遣者

- | | | |
|---------|---------------------|----------------|
| ・ 上江洲利奈 | 第18回「世界青年の船」事業既参加青年 | 沖縄県青年国際交流機構会長 |
| ・ 白木邦貞 | 第18回「世界青年の船」事業既参加青年 | 三重県青年国際交流機構副会長 |
| ・ 大城隆晃 | 第22回「世界青年の船」事業既参加青年 | 東京都青年国際交流機構会員 |



2月10日（月）事後活動セッション

時間	内容
14:15 - 15:40	セッション1 - 事後活動派遣代表者によるプログラム ・プロジェクトマネジメント・セミナー の振り返りと事後活動セッションの概要説明(5分) ・既参加青年3名による事後活動事例紹介及びディスカッション(70分) ・セッション2の説明
15:40 - 15:50	休憩
15:50 - 17:00	セッション2 - プロジェクトマネジメント・セミナー委員会によるプログラム ・各グループに分かれての事後活動プランの企画立案(50分) ・発表(外国参加青年2グループ、日本参加青年2グループ)(20分)

セッション1 - 事後活動派遣代表者によるプログラム

(14:15 - 15:40)

ねらい：

- ・参加青年が事後活動の全体像を把握し、SWYAAやIYEOについての知識を深めることで、事後活動に参加しやすくする。
- ・参加青年が事後活動の事例を既参加青年によるプレゼンテーションを通じて知ることにより、具体的に事後活動をイメージできるようにする。

内容：

- ・事後活動セッションの概要説明、プロジェクトマネジメント・セミナー の振り返り、既参加青年3名による発表（事後活動を始めたきっかけや活動内容についての紹介等）

派遣代表者の所感：

- ・各都道府県IYEOを主体とした国内での事後活動から、事業を通して知り得た情報や人的ネットワークをいかした国際的な事後活動まで、幅広い事後活動の形態を紹介することができた。また、既参加青年の事後活動の事例紹介を通じて、プロジェクトマネジメントの重要性を意識付けるとともに、プロジェクトマネジメント・セミナー との関連についても再認識してもらうことができた。



発表の要旨（上江洲利奈）：

沖縄出身の既参加青年で、第18回「世界青年の船」事業に参加した後、ローカル・ユースとして同事業の寄港地活動にかかわり、現在沖縄県IYEOで会長として活動している。2007年からJICAの派遣で2年間ガーナに滞在していた。沖縄ではジュゴンを保護する活動にもかかわっている。事後活動を継続して実施するためには、人とつながり、互いに刺激を受けることが大切である、というメッセージが参加青年に送られた。

発表の要旨（白木邦貞）：

7年間IT系企業での勤務後、33歳の時に故郷の三重県に帰郷した。現在はビジネスを立ち上げ、小さな企業とNGO向けのITコンサルタントの仕事に従事している。これまでの自身の知識と経験を通して、具体的な夢を持つことが大切だと感じた体験から、参加青年には三つのアドバイスが送られた。

1. やりたいと思ったことをやること
2. 人生設計とテーマ決めをしっかりとすること
3. 時間は限られているので、できることに集中すること



発表の要旨（大城隆晃）：

第22回「世界青年の船」事業での経験が出発点となり、ケニアのスラムに住む子供たちの就学を支援する「Tupendane」という団体を立ち上げ、事後活動に取り組んでいる。活動を始めるに当たって、時間と活動資金を確保するのに苦労した。事後活動を実施するに当たり、そのモチベーションともなる「Driving force（原動力）」を見付けることが大切である、とのアドバイスがあった。



セッション2 - プロジェクトマネジメント・セミナー委員会によるプログラム（15:50 - 17:00）

ねらい：事業参加後の事後活動プランについて、参加青年自身が企画立案し、帰国後の活動をスムーズに開始できるよう具体化する。

内容：外国参加青年は国ごとに、日本参加青年はテーマごとに八つのグループ（環境、グローバルリーダー育成事業の広報、教育、国際的な活動、異文化理解）に分かれ、事後活動の企画立案を行った。話し合いをする際は、以下の六つのポイントについて検討することをプロジェクトマネジメント・セミナー委員が伝え、話し合いの結果は模造紙にまとめられた。

1. ゴール
2. 目的
3. 活動内容
4. 理由
5. 活動時間、期間
6. モニタリングと評価

グループでの企画立案後は、外国参加青年と日本参加青年のグループから各2チームが選ばれ、全体の前で発表をした。発表は質疑応答を含め各2分間であった。

セッション終了後には、プロジェクトマネジメント・セミナー委員は、各グループがまとめた模造紙を掲示して共有した。



派遣代表者の所感：

- ・参加青年は、事業参加後、数か月以内を実施目標とする具体的な活動計画や参加国内での共同活動を企画した。さらに、既に何らかの活動を始めている青年と、今後新たに社会貢献活動に参加しようとする青年が、新たな活動の可能性について、互いに刺激し合い意見交換をした。また、グローバルリーダー育成事業を始めとした内閣府青年国際交流事業の広報も事後活動の一つであると認識し、効果的な広報の仕方や「自分たちが既参加青年としてできること」についてディスカッションするグループもあった。参加青年たちは積極的にセッションに参加していた。



各国の事後活動案

パーレーン

パーレーンにおける若者のボランティア活動への参加を促進することをねらいとし、パーレーンの参加青年は、地域の青年たちのソフトスキルの向上を目指す民間セクターを巻き込み、リーダーシップスキルを高めるためのプロジェクトを計画した。プロジェクトは以下の活動を含む。

1. IDカードの作成
2. 研修の実施
3. フォーラムの開催

活動を実施するに当たり、ウェブサイトなどのメディアを利用したキャンペーン活動を行う。

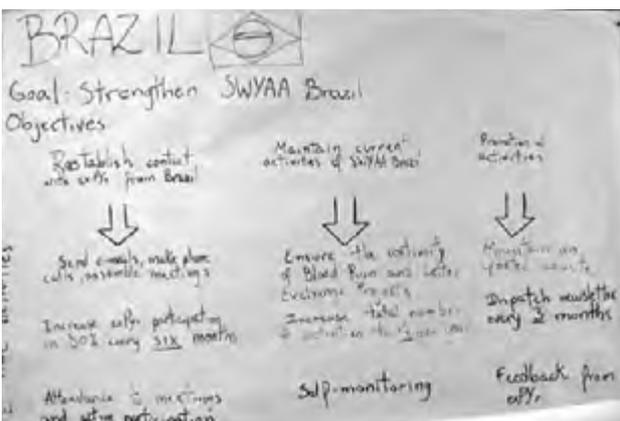
ブラジル

ブラジルの参加青年は、SWYAAブラジルの強化と既参加青年のネットワークの再構築をすることをねらいとし、以下の活動を計画した。

1. メールや電話による連絡、ミーティングの開催
2. 献血と文通プロジェクトの継続
3. ウェブサイトの更新と維持

また、今後、活動を発展させるために、(1) 連絡の取れなくなってしまう既参加青年とのコンタクトを半年ごとに3割ずつ上げ、(2) 3か月毎にニュースレターを発行し、(3) 1年間の活動数を四つに増やすことを計画した。この活動のモニタリングと評価として、以下の方法が検討された。

1. 会議の出席とメールを使った積極的な参加
2. 自己評価
3. 既参加青年からのフィードバック

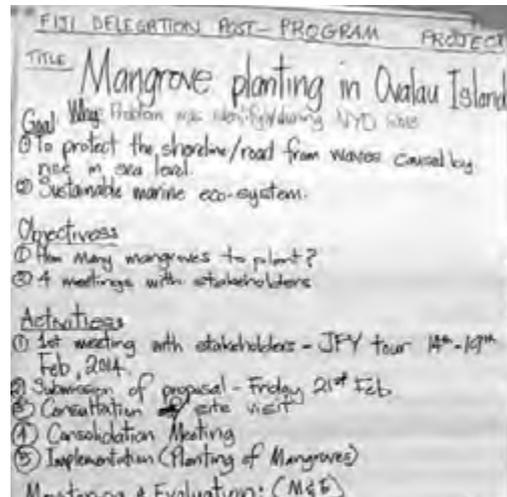


フィジー

フィジーでは、地球温暖化による環境問題が顕著なため、フィジー参加青年は、Ovalau島におけるマングローブの植林を計画した。その目的は、以下の2点である。

1. 海岸線を海面上昇による波から守る
2. 持続可能な海のエコシステムにする

活動の実施に当たっては、どれくらいのマングローブを植えるのかを検討し、出資者との4回の打合せをし、植林が実行された後は、青少年スポーツ省を通じて、青少年スポーツ省職員と青年コーディネーターやユース・ワーカーによるモニタリングの協力を得る。



インド

インドでは、読み書きができない人の割合が農村地域で高いため、インドの参加青年は後進地域での教育を促進することをねらいとし、5年で五つの農村地域に教育プログラムを広げる計画を立てた。具体的には、存在する資源を適切に利用し、政府、NGO、NPO、他団体からの支援を受けながら、以下の活動を実施する。

1. 農村地域の人々の教育に対する意識を高める。
2. 子供と大人の両方に対し夜間教育を行う。
3. ファシリテーターの特別訓練を行う。

この活動を実施するための5か年計画は以下のように立てられた。また、活動のモニタリングは、地域の団体に責任を課すこととする。

1. 最初の3か月は適切な地域を選ぶ。
2. その後の9か月では、教育の現状を知り、調査を行う。
3. その翌年からは、子供と大人の両方に教育をする。
4. 教師へ新しい教育方法を教える。
5. 最終年度には、活動の評価し、持続することを意識する。

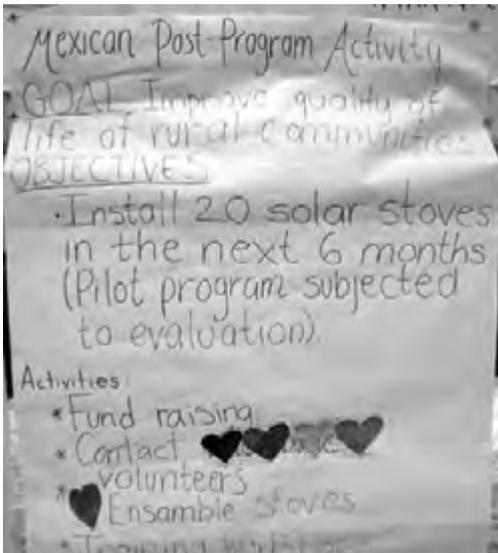


メキシコ

メキシコの参加青年は、農村社会の生活の質を高めることをねらいとし、半年後までに20の太陽光ストーブを備え付けるというパイロット・プロジェクトの計画立案を行った。プロジェクトは以下の活動を含む。

1. 資金調達
2. ボランティアのメンバーの協力を得て、全国からストーブを集め、ストーブの使い方やメンテナンスに関するワークショップを行う。
3. 太陽光ストーブを農村に設置し、必要に応じてフォローアップを行う。

またプロジェクト終了時は、評価を行い、次の活動につなげることを計画した。



スウェーデン

スウェーデンでは、既参加青年がそれぞれ（SWYAAではない）地域活動にかかわっており、新たな活動を起こすのが困難なため、SWYAAスウェーデンとしては、資金提供をすることで他国のSWYAAによるプロジェクトを支援することを計画した。その資金を調達するために、毎年行うイベントを決め、少なくともUS\$1,000を集めることを目標とする。

資金調達のために計画された活動は以下のとおり。

1. スポンサー探し
2. 日本文化ワークショップの開催
3. 資金調達（ファンドレイジング）のためのオークション
4. 広報
5. スウェーデンと日本の団体との協力の

モニタリング方法として、定期的なグループミーティングを開催し、SWYAAレポートに評価を掲載する。

タンザニア

タンザニアでは、SWYAAタンザニアのネットワークの再構築と強化をねらいとし、その後、福祉分野で貢献できるような活動を実施することを計画した。

SWYAAタンザニアのネットワークの再構築と強化のためには、2014年の7月までにSWYAAのデータベースを更新する。福祉分野での社会活動としては、2014年12月までに二つの孤児院を支援することが計画された。この活動を実行するために、以下の活動計画が立てられた。

1. SWYAAのリーダーとタンザニアの既参加青年がミーティングをする。
2. 3か月に1回、二つの孤児院に訪問し、寄付をする。
3. タンザニアでリーダーシップと青年起業のセミナーをする。

モニタリング方法として、半年毎に振り返りのミーティングを実施し、年次総会で活動レポートを提出する。

トルコ

トルコの参加青年は、「貢献（ConTURibute）・団結・青年」をキーワードとした社会的責任プロジェクトとして、農村地域／へき地の世界的認識と地元青年との交流を計画した。プロジェクトは以下の活動を含む。

1. 短期間の奨学金制度
2. 大学のクラブにおいて、グローバルリーダー育成事業で得たノウハウを共有する。
3. 障がいのある青年のためのサマーキャンプの実施（地方自治体と協力して、ネイチャーキャンプを探す）
4. 社会福祉団体と共同で実施する青年のリハビリテーション活動
5. プロジェクト・サイクル・トレーニング（NGO、学校、大学）



日本 <教育>

日本参加青年の教育グループは、異文化の場を創り出すことを目的とし、2週間に1回、他国からの講師3~4名による授業を実施することを計画した。その活動は、外国人と小学校教師との協同で実施され、(1) 子供たちの将来の選択肢を広げ、(2) 英語を話す機会を作り、(3) 子供たちが日本と他国について考え、(4) 差別と偏見をなくすことをねらいとした。

モニタリングと評価の方法としては、子供たちによる評価と、親や教師による評価を行う。

日本 <異文化理解>

日本参加青年の異文化理解グループは、SWYAAのネットワークを強化し継続するための「SWY Nexchange」というプログラムを計画した。その具体的な活動は以下のとおり。

1. 既日本参加青年と既外国参加青年のネットワークを作る。
2. 日本参加青年が外国参加青年に何ができるかという情報提供をする。
3. 外国参加青年に日本に来てもらい、地域での経験をしてもらう。
4. 1回の訪問で一つのボランティア活動を行う（学校訪問・ファームステイなど）。
5. インターネット上で経験を共有する。

2006年の事業参加から8年を経て、既参加青年としてグローバルリーダー育成事業へ参加させていただいた。事業では、「事後活動セッション」を担当し、参加青年が事業参加後の活動についての理解を深め、またそのきっかけ作りをサポートすることを目的とした。また、事後活動セッションの外に、「SWYAA・IYEOブース」を設置し、SWYAAやIYEOの活動を紹介するとともに、参加青年が自由時間等を利用して個別相談できる場を設けた。

今回の活動のメインとなる事後活動セッションでは、3名の既参加青年が、各自10分程度のプレゼンテーションの中にそれぞれに伝えたいメッセージを盛り込んだ。私が参加青年に伝えなかったことは、「つながり続ける」ということ。私は、事業参加をきっかけに、青年海外協力隊へ参加し、さらに、その二つの経験から得た人的ネットワークや情報が、現在の事後活動の根底にあることを伝えなかった。他2名の既参加青年によるプレゼンテーションでも、それぞれのメッセージが伝えられた。事後活動セッションのあと、国ごとのグループディスカッションが行われ、私たち3名の既参加青年も各グループを回りながらサポートしたが、どのグループも活発な意見交換や企画立案が進められているのが印象的だった。これは、それまでのリーダーシップ・セミナーやプロジェクトマネジメント・セミナーなどにより、参加青年の意識付けがしっかりできているということだと感じた。

SWYAA・IYEOブースでは、事後活動セッションでは自らが発表することが主であったため、そのサポート

ができた。参加青年のブース利用者は、事後活動セッション実施後から増えたように感じた。ただ、もっと効果的にブースを利用してもらうためには、参加青年への案内方法や事後活動セッションの実施日など、再考すべき点があるかもしれない。また、ブース利用者は、外国参加青年が比較的多かったように思う。自国の事後活動組織とのかかわりがまだあまりないことを相談する人、SWYAAやIYEOのネットワークをうまく利用して各国の事後活動組織を活性化するにはどうしたら良いか等を相談する人がおり、具体的にどういう働きかけをしたら良いか、IYEOとして連携できることなどについてアドバイスをした。IYEOにとっても同様の課題はあり、できるだけ早く、スムーズに事後活動をスタートさせるために、各都道府県IYEOと参加青年がどのようにかわるべきかについても考えさせられた。

今回の派遣を通して、改めて私自身の活動の目的や意義を再確認・整理し、また、参加青年に対してアウトプットすることで私自身にとっても、事後活動を見直す良い機会となった。また、事業名に「グローバルリーダー」と明言されているように、参加青年のリーダー意識が非常に高く、その中で、私たち既参加青年がアドバイスできることは何だろうと考える必要があった点には多少苦労したが、それ以上に、今後の新たな活動の可能性が見い出せたことにワクワクしている。参加年度が違い、参加青年もいつか青年ではなくなり、それでもなお同じ想いや経験を共有できるのも、この事業ならではの強さを感じた。

グローバルリーダー育成事業に既参加青年として乗船した率直な感想は、私自身が一番の成長の機会をもらえたということである。当初、この事後活動セッションにおいて、事後活動をしている動機及び目的、そして、早晚参加青年がぶつかるであろういろいろな壁をどうやって乗り越えてきたのかということ伝え、身近な先輩として参考にしてもらいたかった。しかし、私が何かを教えるということ以上に教えてもらったことの方が多かった。

参加青年たちとの交流を通じて感じたのは、自分たちの成長を楽しんでいるということであった。多国間の密度の濃い交流を通じて、いろいろな問題を抱えつつも、異文化を理解しながら前進していくことの大切さ、そして、未来はまさに自分たちの世代がこれから作っていくのだというリーダーとしての意識を持っているように感じられた。それは、事後活動セッション内でのディスカッションでも垣間見ることができ、青年たちは、この

事業に参加した後、自分たちは何ができるかということをも真剣に考え、そして、独創的なアイデアを出し合い、具体的なアクションプランを共有し合っていた。

そして、もう一つ感じたのは、この事業を通して意識を共有した人たちの世界的なネットワークの可能性である。今の参加青年たちの世代は、スマートフォンやソーシャルメディアなどを通じて、リアルタイムに、よりダイレクトに個人と個人がつながることができる。様々なスキルを持った人材が世界規模で問題意識や危機意識を共有でき、共に何かをしようというきっかけが生まれることはこれからの時代にますます必要なことなのではないかと思った。

最後に、10年を経て、既参加青年として再びにっぽん丸に乗り、事業に参加したことで、IYEO会員として青年を育てる枠組みを作り、発展させていくことの重要性を再認識した。参加青年たちは船の中で国を越えて自分

の立ち位置を認識したのであるが、私は既参加青年として、世代を越えてより良い社会、世界を作っていくために、世代間がつながることの重要性を感じることができた。できることはまだ少ないのかもしれないが、世界の中の日本のさらにその中の自分の住んでいる地域で何が

できるのか、そして、これからこの事業に参加していく新しい世代のために何ができるのか、世界と世代の懸け橋になりたいと感じることのできた事後活動セッションであった。

大城 隆晃

「新たな課題を感じられるからまた船に戻ってくる。」今回の派遣を終えた時、私は素直にこう思った。今回の派遣では、プロジェクトマネジメント・セミナーの一環として、事後活動の報告をすることになっていた。そのため、私たちは事後活動をする上で、どのようにプロジェクトマネジメントの手法を用いているかを意識しながら報告した。私が選んだテーマは、第22回「世界青年の船」事業参加後に立ち上げたケニアの学校サポートプロジェクト「Tupendane」であった。

セミナー当日、私はイントロダクションと個人のプレゼンテーションを担当した。イントロダクションでは前セッション（プロジェクトマネジメント・セミナー）の内容であるPDCAサイクルについて簡単に振り返った。個人のプレゼンテーションでは、「Tupendane」の活動を紹介するとともに、「Find your driving force」をテーマに、活動を続ける上で強い気持ちを持つことが大切だというメッセージを伝えた。プレゼンテーションでは、事前にスクリプトを作らなかったため、自分の言葉でメッセージを伝えられたと思っている。その証拠に、プレゼンテーション終了後に「君のプレゼンテーションは良かったよ。」とか、「君の活動は僕らをやる気にさせてくれた。僕らも国に帰ったら孤児院を訪れて

みる。」と参加青年数名が言ってくれた。参加青年全員ではなかったかもしれないが、数名にでも想いが届いたことで今回の派遣者の役割が果たせたと思う。他方、冷静に自分のプレゼンテーションを振り返ってみると、プレゼンテーションや英語のスキルが足りなかったと感じている。特に限られた時間の中でメッセージを分かりやすく伝えること、そして、それを英語で行うためのスキルは私にはまだ備わっていなかった。このスキルについて、今後伸ばしていかないといけないと強く感じた。

仕事を含めた日常生活で200名近くの人前でプレゼンテーションを行う機会はないため、このような機会を頂けたことは本当に良い経験となった。第22回「世界青年の船」事業以降、何度か「世界青年の船」事業にかかわっているが、「世界青年の船」事業は、毎回のように新しい課題を私に与えてくれる。今回のグローバルリーダー育成事業でも新たな課題を見付けることができ、次の一歩を踏み出す良い機会となった。今後とも「世界青年の船」事業やグローバルリーダー育成事業とかかわりを持つことにより、自己成長していくとともに、「Tupendane」の活動を続けることにより、社会を良くしていきたい。

